



統

一

法財人團

統一團發行

次 目

法 悅 と 願 行 (其三)	本多日生
開 目 鈔 講 話 (完結)	小林一郎
本佛實在の宗教哲學(二十四)	河合陟明
大藏經要義續篇(第二十九)	本多日生
記 事	
○本部團報	
○福島教信	
○入帳報告	

統 一

第三十卷 第二十七號  
昭和十八年五月一日發行

第五百七十八號

第四十八年 五月號

昭和十八年六月一日發行 (每月一日發行)



財團 法人 統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經  
過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ  
外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク  
萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對  
應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向  
上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ  
決シテ他ノ追隨ヲ許サザル所ナリ  
統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母  
體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ産出  
セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會  
アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ  
又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ  
炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ  
與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ  
大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精  
要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ヲ超  
エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行  
シ來レリ  
統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者  
本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進  
ンテ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ  
將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ執行セン  
ト欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ  
第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第  
二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮  
スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起  
スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シ  
テ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日  
蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲  
ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一  
ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ  
教旨ノ正明 研學ノ淵達 活動ノ旺盛  
此等ハ統一團ノ標語ナリ  
寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文  
化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永  
久ニ持續セントスル本團事業ノ眞實ハ  
最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ  
同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法  
爲國爲一切衆生切に懇望スル所ナリ

本團 畧 則

- 目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ闡明シ  
テ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文  
化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ  
培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ  
理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ  
教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」  
ヲ發行ス
- 維持員 本團ノ事業ヲ翼贊シ一時金參  
百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セ  
ラル、方チ維持員トス
- 贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五  
圓以上ヲ寄附セラル、方チ贊助員トス
- 正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金  
貳圓五拾錢ヲ提出セラルル方チ正團員  
トス
- 入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ  
適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌チ  
無料ニテ頒布ス
- 隨友 統一誌ヲ購讀スル方チ隨友トス

法悦と願行

(其三)

本多 日生

願といふのは、俗にいへば志を立てること。今の言葉にしていへば、理想といふものをそこに描いて、新しいふこ  
とをしよう、と筋立つたことを考へて行く。普通の人は筋立つて考へるといふことがない、何のために暮して居るの  
やら分らないのである。何だか忙しい、ごたごたしてその日その日を暮して、ああまた大晦日になりました、といふや  
うな譯であります。「明日は」といへば、「明日はお難者を拵へたりなんかして」、といふやうな工合にいろいろ考へて  
居るが、その日が来て何が出来て居るかといふと、何にも出来て居らぬ。「さア秋になる、去年は遊びに行つたから蒲  
團の仕度が出来て居らぬ。」元日から秋の來ることは解つて居る、解つて考へては居るが、そんなことで生涯を終つて  
しまふ。何でもなしに一生を送つてしまふことにならぬのであります。そこで、その日の雑用といふことも大事だから  
しなければならぬけれども、折角生れたならば、ぼつとして生涯暮したといふことを後悔せぬやうに、ここに志を立  
てる、理想を立てる、解り易くいへば願を起して、そのことのために身を托して行く。無論家庭の雑用もせんならん  
けれども、そんなことにはのみ没頭して、生涯譯も分らずに暮すといふことは詰らぬに違ひない。然らば、その理想を  
どういふ風に描くかといふと、これが願行といふことにならぬのであります。

それについて、その考へ方が大變大切なのであります。あなた方のまづお手本となるべき婦人が、お經の中に澤  
山ある。もう二千年もたつて、今日の人は非常に進歩して居る、昔の女なんぞといふものは詰らない、殊に印度の女



なんといふものはとても詰らぬものだと思へて居るでせうけれども、然うではない。東洋の文明は、なかなか昔の方に偉い人がある。それはまことに結構なことなんで、先祖に偉い人が居つたといふ、これほど有難いことはない。坊さんでも今の坊さんよりは、昔の日蓮聖人とか、傳教大師とか偉い人が澤山あります。女でも和泉式部とか、清少納言とか、偉い人が澤山ある。昔居つて呉れた方が有難い。過去に立派な人が出て居らぬと、今の者は慢心して、そして西洋みたいになつてしまふ。西洋では先祖に偉い人が居らぬものだから、そこでああいふ變な文化が起つたのであります。例へば土方を見ると、先祖が土方で、入墨をして博奕を打つた、それが今日變つて請負師といふ名前になつたんだが、その子供が少し學問をすると慢心して、お父さんは何にも知らぬ、といふ。それア自分の名は自分で書かなければならぬといふことがありますから、二晩か三晩手習をして漸く假名で書くことは出来るけれども、自分より拙い字だといふことを考へたときに、子供は親を馬鹿にする精神が起る。「お父さんこれが讀めるかい、讀めないだらう、へん明盲目が」といふ。他所から手紙でも来たときに、「おらア字を知らんから一寸讀んで見な」、「何だい、一體これア」といふやうなことになる。そこで先祖にいい人がないといふと、後進の者が慢心をしてやり損いをするのであります。東洋の尊いのは、その家柄を尊ぶ、先祖を敬ふといふことに東洋の光があるのですが、西洋では新しきを尊ぶ、これは實に西洋文化の失敗なのであります。本が本當でないからそこで新しいものがよくならぬ。東洋のいいところは、これからお話をすれば分りますが、女なら女について澤山いい手本があります。今日はそのうちの勝鬘夫人のことを一つ申上げることになります。

勝鬘夫人は、舍衛國の王様の友稱といふ人の妃で、非常に賢い、綺麗な立派な婦人でありました。その勝鬘夫人はいまの佛法を信じて、佛法が有難いといふところから願行を起した。その願行の立て方は、ここには三段にして佛様に申上げて居るのでありますが、初め十段にして志を述べ、それからそれを三つに纏め、更に一つに纏めた順序があつたのであります。之を十大願として、三大願として、一大願として説いた關係を申上げて、尙ほその上に、法華經の教へについて少し付加へて申上げて見たいと思ふのであります。

その十の願はどうであるかといふと、委しくいふと長いからして要點だけ申上げますが、第一には佛の定め給ひし戒律、斯ういふことをしてはいかんとか、佛様がお定めになつた、つまり善いことをつとめ、悪しきことを戒る、惡心といふものを起さないやうに、戒律を守つて行くといふことを第一に見て居る。第二には慢心を起さない、どこまでも崇むべき人は崇めて行く。第三には怒りを起さない、腹を立てない。第四には嫉みの心を起さない。第五には物吝みをしない。第六には慈善の心を起して、可哀さうな者に憐みを施してやる。第七には總ての人の苦しみを救はんと考へて、何時も自分の心を失はないやうにする。第八にはいよいよ實際に苦んで居る者に對して、救ひの手を下す。第九には惡人でも決して一概に之を嫌はない、けれども惡人は之をいまして直るやうに説伏する。第十には正しく佛の教へを守つて、それを弘めるやうに力を盡す。といふことを申して居るのであります。この十の願からして、今度之を三つに縮めたのです。どういふ風に縮めたかといふと、第一には自分が佛様の教へを正しく理解して、迷信的でもなく誤解をもたないやうに、正當に佛法を了解するところの力を自分が得たい。多くの人がやつてゐるやうに、佛法を誤解したり迷信的になつたりしてはいかぬ。佛様の教へは斯ういふものだといふことを、正しく自分が理解したいといふのが第一の願である。第二にはその正しく理解した教へを、人々に話をして聴かして、そして佛法を信じるといふやうに導いてやりたい。第三には如何なる場合に於ても佛の教へに傷をつけず、佛の教へのために説き、説いてそして自分の生命を捨てても佛の教へを守るといふ精神を失はないやうにしたい、といふことを申して居るのであります。その三大願からもう一步進めて、今度はそれを一つの願に纏めたのです。その一つの願を攝受正法といつて、佛様の教へに傷をつけない、如何なる場合にも佛を守り、佛の教へのために力を盡す、所謂護法、法を護るといふことを申して居るのであります。

攝受正法といふのは、佛の正しき法をおさめ受けるといふので、おさめ受けるといふのは、之を漏らさないやうに、



いいんばいに纏りをつけて自分が受け、そして護つて行くのであります。受けたといつても大事なところをこぼして、粗末なところを少しばかり護つて行くといふことではいかん。これは女の人に於て餘程注意して置かなければならんことで、どうも婦人には、いいところをこぼしてしまつて、そして粗末なところを少しばかり持つて行くやうな人が多い。であるから勝鬘夫人は攝受正法、佛様のいいところをすくつて、之をこぼさないやうに持つて行き、そして自分が之を護り、之を世の中に弘めて行くといふこと、之を簡単にいへば護法、法を護るといふことになるのであります。この攝受正法の一つの願に自分は心をつめる、斯ういふことを申して居ります。「菩薩の願は限りなく多いけれども、この法を護るところの一つの願に一切が收つてしまふ」といふことを佛様に申上げました。すると佛様は非常にお賞めになつて、「善哉々々、勝鬘汝の智慧は實に秀でたものであるぞ」と仰つたのであります。

そこで勝鬘夫人は、更にそのことを擴げて申しました。「一切の佛法は廣いけれども、それがただお經に書いてあることだけであるならば、世の中に用を爲さぬ。生きたる人がそれを心得て、そして心得ざる者に取次いで呉れる、そこに佛法の利益があるのである。ただお經が箱の中に入つて居るだけなら、こつちはどうも仕方がない。一切經が庫の中にある、「御覽なさい、澤山ありますよ」といつただけぢやいかん。お經の意味は澤山あるけれども、その意味合を纏めて、斯ういふことが書いてあるといふことを、その人に解るやうに話さなければならぬ。だから「その心を話す役目をやつて見たい」といふことを勝鬘夫人が申して居ります。しかしながらさういふ風にして行くには、まづ自分が佛法をよく心得なければならぬ、そしてその心得るといふことは容易でないけれども、とにかく法を護らうといふ志といふものが、非常に大切なことになつて行くのであります。

一切の善根といふものは法の中から出て来る。法によつて人の心を教へ、人の心がよくなり、そして人の善根が行はれて行くのであるからして、教へが元をなして、一切の世の中のよいことが爲されて来るのであります。その教へといふものを捨てれば、人の心はねじくれ、ねじくられて来れば悪いことをするからして、教へといふことが一番大切であります。無量の善根の雨を降らし、そして、一切世間の安穩快樂といつて、世の中の人が幸福を受けるといふことは、法が盛んに行はれて行くといふことによつて得られるものである。自分の夫は久しく佛法を信じて、親切な人間になつた、しつかりした人間になつた、といふ風に、その夫婦の者が信仰して来れば、その夫婦の家庭及び社會によい結果を齎すに違ひないけれども、しかしただ一人が信仰して善人になつたとて、それではまだ本當でない。その善人ならしむるの教へ、それを本にして、一つの家庭、一つの社會にだんだん弘めて行くといふことを考へなければいかん。さうして中には、その教への分り難い人もあらうから、さういふ人には難しいことをいつてはいかん。佛様の教へには淺いところから、深いところに至るまで揃つて居る。だから分に應じて、解り難い人には、解り易いことを以つて導き入れるやうに、さういふもののあることを話し、或はまた意味の深いことでなければ安心出来ないといふ人には、深いことを話して、そしてその人を導き度いと思ふ。しかも教へといふものは、向ふから話して下さいといつて来る人は、全然無いかとはないけれどもまづ少い、だからさういつて来る人を待たないで、向ふから頼まれなくても、此方から出掛けて行つて、そして話して行くやうにしなければいかん。そこで「不請の友」「世法の母」とならん、といふことを勝鬘夫人が誓つたのであります。不請の友といふのは招待せられない人である。「どうぞ来て話をして下さい」「俸をもつて迎へに来たら行きますよ」そんな態度ではない。さういふ待遇を以つて迎へに来るといふ人は極く稀である。迎へに来ないでも、一寸途中まで来ましたがお寄りしました、といふやうに、暇さへあれば教への教へを話してやらなければならぬ。そしてお茶一杯も貰はずに歸つて来るといふ、その教へのためには自から「請はれざるの友」となつて、招かれずしてこつちから行つて話してやる。さういふ風にして、世間の人を救はんがためには、自分がただ一人や二人の子供の母といふやうなことを以つて任するのではなくして、一切世間の惱める多くの人のために、慈悲の母となつてやらなければならぬ。この精神をもつといふことはなかなか容易なことではないけれども、さういふやうな偉い人が昔居つたのでありますから、あなた方の手本に居るんであるからして、今日三千年経



つて我が進んだといふならば、日本の婦人は次第々々に精神がその方に向いて行かなければならぬ筈であります。ただ蓋りに解放を叫んで我儘をやる、夫と定めては自分の自由がきかんからといふので、所謂共同生活、氣の合ふたときは共同生活をして居るが、氣に入らぬやうになるとぶんと行つてしまふ、さういふ新しがりをやつてはいかん。婦人の行くべき道は、宗教の信仰を以つて自から精神を保ち、そして世の惱める人に對して、この優しい心を以つて導いてやる、といふことであらねばなりません。

尙ほ法のために盡さうとするには、法の仲間を争ひが起るとき、之を調停することを考へて置かなければならぬ。ここに「法朋」といふ字を使つてありますが、これは「法の友達」であります。「友」の字を使つて「法友」といつてもよろしい。いづれにしても「法の友」で、その法の友が争ひをしたり、衝突をしたりする場合、自分は極力その衝突を緩和して、同じ道を信する者が心を協せて、そして世のために佛の教へを盛んにしなければならぬ、と斯う勝鬘夫人が申上げたところ、佛様は非常にお喜びになつて、勝鬘が所説の如し、と仰有つたのであります。

初めに十の願を説き、後之を三つに縮め、更に之を一つにして、攝受正法といふ護法の一願に止めをさした。その願の立て方がまことによろしいといつて、佛様は勝鬘夫人を非常に讃められて居るのであります。淨土真宗のやうに阿彌陀の方には願があつても、こつちに一寸も願を起さないやうでは、これは正しき佛法ではないのであります。自分が疑るといふ一方ではいけないのである。佛法では左の手を佛様に對して、大慈大悲の手を引いて貰ひ、右の手を以つて憐れな者を救ふ、といふところに本當の佛法があるのである。兩手でぶら下つて、みんなぶら下つて來れば、世の中を益するところはないのである。家庭に於てもやはりその通りで、一つは親に疑つて、親の有難いことを考へて行かなければならぬけれども、一方の手では家の手助け、親の手助けをして行かなければならぬ。兩方ともぶら下つてしまつて何にもせんでよろしいといふことは、如何にも榮なやうであるけれども、さういふ横着なことから佛法を信するといふことになる、いくら信じて世を益することはないのであります。

## 開目鈔講話

(完結)

小林一郎

日蓮上人はなにも自分の一身を考へて居るのではない。法華經が末の世を救ふのだといふことをお釋迦様が仰しやつたから、そのお釋迦様のお心持に基いてこの法華經を日本の國に弘めて、さうしてこの國を建直し、一切の人の心を土臺から良くして行かうといふ考へでやつて居るのだから、日本國の一切の人の親しい親のやうなものだと思はなければならぬ。天台宗の人々は一番初めに天台宗を日本に弘めた傳教大師の精神に背いて法華經を捨てて、さうして大日如來を拜んで見たり、或は又念佛をする者を助けたりなどして居る。斯ういふ者こそ

は我が日本の國の怨と看做すべき者である。彼の爲に惡を除く者は即ち彼の親だと淫繁經に言つてあるぢやないか。人の過ちを直すといふことがそれが大慈悲なんだ。誰だつてお前は間違つて居ると言はれれば悪い氣持がするけれども、そんなことぐらゐで彼此れ顧慮して居るべ

き場合ではない。幾ら相手が腹を立てても、どんなに迫害を受けてもそんなことはかまはない、本當の事を言つて間違つた信仰を改めさせるといふこと、これが親の慈悲だ。親は自分の子供が可愛いから、小言も言ひ、泣いてもかまはないから灸をすえる、苦い藥を服ませるのがこれが親の慈悲だ、日蓮が今迫害を受けても、世間の人に怒られても、そんなことに頓着しないで法華經を一心に弘めて居るといふことは、ちやうどさういふ心持で居るのだ。

無道心の者生死を離る事はなき也。教主釋尊の、一切の外道に大惡人と罵詈せられさせ給ひ、天台大師の南北並に得一に三寸の舌をもつて五尺の身を斷つと、傳教大師の南京の



諸人に最澄未だ唐都を見ず等いはれさせ給ひ

し、皆法華經の故なれば恥ならず。愚人に譽められたるは第一の恥也。日蓮が御勸氣を蒙れば天台真言の法師等悦しくやをもよらん。

かつは無慚也。かつは奇怪也。

「無道心」といふのは佛の本當の道を求めようといふ心持の無い者、さういふ者は生死といふ世の中の変化を受けない譯には行かない。本當の信仰がないといふと、周囲の人が集まつて褒めればよい氣になり、周囲の人が集まつて悪く言へばがっかりする。儲ければ有頂天になり、損が行けば腰を抜かしてしまふ。それは全く心の土臺がしつかりしないからである。そんなぐらぐらした心持で居つて幾ら學問しても、幾ら本を讀んでも、それはただ物識りになるだけであつて、實際世の中の変化を離れて世間の累ひを受けないといふ譯には行かない。何でも本を澤山讀んだら利口になるといふものではない。いろいろな事を覺えたつて中心を外れて幾つも覺えて居るのだから、何にもならない。だから實行しなければいけない。佛教を學ぶ以上はお釋迦様のお心持に叶つた信仰をしない

又日本でも傳教大師が叡山に於て法華經を弘める時には奈良の諸宗の者が傳教大師を邪魔にしている悪口を言つて居る。さうして傳教大師が支那に留學した時に、支那の都に行かなかつたといふことを奈良の坊さん達が後で悪口を言つて居る。

これは前にも申し上げましたが、傳教大師と弘法大師と二人一緒に支那へ留學された。船は違つて居る、二艘あつて、傳教大師の乗られた船はずつと南の方の今の福建近邊で止まつて其處で上陸した。それから弘法大師の船はさう南の方に行かないで、支那の都へ行くに都合の好い所で止まつた。昔のことであるから今のやうに航海術が進歩して居りませぬ、潮の調子で以て同じ所へ止まる譯に行かない。そこで弘法大師は都に行くに都合が好い所で上陸が出来たから、直に唐の都に行つて、皇帝にも會へば、又地位あり身分ある人にも會ひ、二年餘りの間大變華かに交際をして、大に持囃されて日本へ歸つて來た。傳教大師はそれよりずつと南の方へ船が流されたので、支那の都の長安に行くには随分手間が掛る、つまり折角支那へ來られたのだから、都に行つて皇帝などにお會ひになるつもりならば、都へお送りしませうといふことを役人達が申した。傳教大師はその必要はない、自分が支那に來たのは佛教を研究に來たのだからなにも王

ければならぬ。どんなにお經を澤山讀んでも、幾ら佛を念じてもそんな事で人間がこの世の中の煩惱を離れるといふことの出来るものではない。

さういふやうなことを考へて見ると、日蓮が今迫害を受けて居るといふことは、これはなにも軟くには及ばぬのである。昔から正しい教を弘める人が迫害を受けたといふ前例は多い。お釋迦様のやうな佛様でも「一切の外道」即ち婆羅門の人々には大悪人と罵られた。お釋迦様は大慈悲を以て一切の人をお救ひになるのだけれども、佛教が弘まる爲に婆羅門教がだんだん勢力を失つて行くので、婆羅門の連中が殘念で堪らない。それで國王などの所へ行つて、彼の釋迦といふものは大悪人で大勢を感はしますと言つて讒言したことも幾らもある。又天台大師も支那に出て法華經を弘めた時には、南三北七といつて、佛教が南の方に三派、北の方に七派あつて、合はせて十派ありましたが、その十派の者に怨にされた。それから又日本に得一といふ坊さんがある、これは三論宗や何かを研究した人でありますが、その人も天台大師を訪ねて行つて、三寸の舌を以て五尺の身に害を受ける、佛様の心持に背いた自分勝手な説を説いて、自分も害を受けるのだなどと言はれたこともある。だから昔から正しい教を説いて世間の迫害を受けるといふ例は随分多い。

様に會ひに行く必要はない。又世の中の有力者に會つて交際するといふそんな必要はない。そんな暇があれば佛教の事を本當に研究した方が宜しいといふので、傳教大師は都に行かず、當時の勢力のある人に交際もしないで、天台宗真言宗の兩方の教義を十分研究して歸つて來られた。これは傳教大師が眞面目な立派な人物であるといふことの證據になるので、今私共が傳記を讀んで見ても勿論尊いことだと思ふ。ところが傳教大師が歸つて來て後になると、奈良の坊さん達はこれを悪口を言ふ。折角支那へ行きながら皇帝にも會はない、都にも行かないといふのは何の事だ、斯う言ふ。それは今と考が違ふ。ちやうどその時分には支那へ行くといふのは、現今歐羅巴や何かへ行つたと同様なことでも何でも支那へ行つて新しい事を見たり聞いたりして來れば、その人は價値の有る人だといふ風に世の中で思はれて居る。だから折角支那へ行きながら都にも行かないといふことは、行つた甲斐がないではないか、斯ういふ風に奈良邊りの坊さんは悪口を言ふ。今でもさうでせう。英吉利へ行つたといふのに、倫敦へ行かないで歸つて來た……何だ氣が利かないと言ふ。獨逸へ行つたといふのに、柏林へ行かないで歸つて來た……それでは何しに獨逸へ行つたのか……斯ういふ譯で支那へ行きながら都にも行かないで皇帝にも會はない



いので歸つて来たのでは行つた甲斐はないぢやないか、そんなに片田舎で研究して居たのでは本當の事は解らないだらう『最澄未だ唐都を見ず』斯う言つて悪口を言つたのであります。

併しながらそんな非難をされたり攻撃をされたなんといふことは何でもない。何故そんな非難をされても平氣であるかといふと『法華經の故』である。法華經を弘めるといふことは大事な事なんだから、法華經を弘めるといふことさへ完全にやれば、誰がどんな攻撃をしても非難をしてもそんなことは何でもない。だからそんな事は恥ではない。なアに誰が悪口を言つても何でもない事だ『愚人に譽められたるは第一の恥也』馬鹿な者に譽められた方が寧ろ恥である。これは日蓮上人一生の主張であります。つまりならない奴に譽められたつて仕様がな。然るべき人に譽められたらそれはまあ名譽が知らぬけれども、つまりならない奴に譽められたつて少しも有難いことはない譯であります。だから日蓮も誰に攻撃されてもそんなことは何とも思はない。寧ろお釋迦様以來つこの正しい教を世の中に弘めて居れば、却て俗人などのつまらない者に攻撃されるのは當然だから日蓮もそのつもりで居る。斯ういふのであります。『日蓮御勘氣を蒙れば天台眞言の法師等悦しくやをもふらん。かつは無慚也。』

肉をうる。樂法は骨を筆とす。天台の云、適

時而已等云。佛法は時に依るべし。日蓮が

流罪は、今生の小苦なれば、なげかしからず。

後生には大樂をうくべければ大に悦ばし。

お釋迦様が娑婆世界に出て來られたといふのは苦勞を覺悟で出て來られた。この娑婆世界といふのが人の心が險惡であつて、なかなか正しい教を信するといふ人は少い。それを覺悟でこの娑婆世界に出て來られて、八十歳までの間一日も安心する暇なしに教をお弘めになつた。これを吾々は手本としなければならぬ。どうせ初めからさう樂には行かない。何か大きい事をやらうと思へば苦勞のあるのは仕方がない、迫害が來るのも仕方がない。お釋迦様はその手本をお示しになつたのだから、お釋迦様がこの娑婆世界に出て八十歳まで御苦勞なさつたといふことをこれを吾々は手本とすべきものである。

又羅什三藏といふ人は龜茲といふ國の國王の親類であつて、自分の國に居さへすれば王様の保護を得て安樂であるのだけれども、何とかして法華經を東の方に弘めたいといふ決心をしたから、支那に態々やつて來て、さうして様々な苦勞をして法華經を弘めた。これも一身のこ

かつは奇怪也。日蓮が法華經を弘めて、弘めるに就ては今の天台宗が間違つて居る、眞言宗が間違つて居ると言つて、彼等の迷ひを覺ます爲に、いろいろ議論をするものだから、天台眞言宗の者が憎んで居る。その日蓮が今度は鳥流しにされて佐渡へ行く、もう佐渡へ流されれば生きて還ることは出來ないといふくらゐに言はれて居るのだから、もういよいよ邪魔者を追拂つたといふので天台や眞言の人々は喜んで居るかも知れない。それは本當に無慚である、氣の毒である。自分の方から見れば正しい教を信じないで間違つた教を信じて、正しい教を弘める者に迫害の來るのを悦んで居るといふやうなことは、まるで料簡が顛倒して居るのだから、實に氣の毒であり、又奇怪である。『奇怪』といふのは分別が狂つて居る、どうも世の中に間違つた者が多ければ仕方がない。併し斯ういふやうに世の中が間違つて來て居る時こそは、所謂大慈悲心を有つて自分の一切の利害を離れて教を弘めるといふことに力を盡すべきものである。

夫釋尊は娑婆に入り、羅什は秦に入り、傳教は支那に入り、提婆、師子は身をすつ、藥王は臂を焼く、上宮は手の皮を剝ぐ、釋迦菩薩は

とだけ考へれば法華經など弘めない方が樂だつただけけれども、佛の大慈悲を本當に考へて見ると自分一身の安樂などは考へるには及ばぬといふ決心で、到頭支那の秦といふ國に入つて來て法華經を弘めた。

又傳教大師の支那に研究に行かれたといふのは、やはり同じ心持で、日本に法華經を弘めるのに傳教大師はもう自分の考はお釋迦様のお心持と一致して居るといふ自信は有つて居つた。併し世の中が前に申すやうに支那を大變良い先輩の國と思つて居る時代だから、兎に角一度支那へ行つて研究して來ないと、世間の人が自分の言ふ事を信じまいと思つたから、支那へ行つてさうして天台の教を學び又眞言の教義を研究して歸られた。

『提婆、師子』これは印度で大乘の教義を弘めた人々であり、これ等の人々は皆自分の身を捨ててさうして命に懸けて佛法を弘めた。法華經を讀んで見ると藥王菩薩といふ方は佛の恩に報ゆる爲に自分の身に油を掛けて自分の臂を焼いて、さうして身を苦しませ佛の恩に報ゆる心持を表はしたといふことである。又『上宮』即ち聖德太子は經典を寫す爲に『手の皮を剝ぐ』これは剝いだ譯ではないけれども、自分の身の皮を剝いでも宜いといふ決心をされたといふことが傳つて居るのであります。それから釋迦菩薩といふ方は自分の身の肉を賣つて



佛の教を求めたそくにしたといふことである。又樂法梵志といふ人は佛の尊い教を後に傳へる爲に、筆がなければ自分の骨を砕いて筆にして、自分の身から出た血を墨にして、さうしてこれを書き遺して後の世を益するといふ決心をした。

斯ういふやうに皆苦勞して居る。併し場合に依つてその苦勞の程度は違ふ。或る時は敵を相手に戦つて命を捨てる者もあり、或る時は自分の身を苦しめて人に手本を示すといふ者もある。要するに不惜身命、命一つ物の數としないといふ決心さへすれば、その場合々に應じて一番適當な行ひが出来るだらう。「天台の云、時に適ふのみ」それは行ひがそつくり同じには行かない。命を捨てるべき時には命を捨てる、命を完うして苦勞して教を弘める方が宜い時には命を捨てずして苦勞を厭はずしてやる。皆それはその時その場合に應じたのである。だから「佛法は時に依るべし」佛の教を世に弘めるのに今の時代はどういふ時代だといふことを考へて、その時代に最も適切な態度を以て教を弘めなければならぬ。ただ昔の人の眞似をするといふのはつまらない。

これは今でもさうであります。昔の人の眞似をそつくりやれない、今日も或る學校の學生が來たからさういふ事を話したのですが、どうも今は大事だから國家の爲に

は佛にも成れるのだ。であるから後の世の事を思へばこの世の苦勞などは何でもありはしない。日蓮が今佐渡に流されたといふことは、人は大變苦しいことだと思ふだらうけれども、この世の事を見たら人間一生涯百まで生きる者はない。六十年か七十年である、この間にどんなに苦勞したつて、この苦しんで教を弘めた結果として、後の世は佛とも成つて大きな喜びを感じるやうになるのだから、これに比べればこの世の苦みといふものは何でもない、斯う思ふ。人から見れば苦しいやうに思はれるかも知らんが、日蓮自身は喜んで、日本國に於て第一に富める者は日蓮なるべし、自分ほど幸福な者はない。斯ういふ考で以てこの苦しい中を越えて居るのである。それだから日蓮の弟子檀那たる者も、日蓮の心持を自分の心持として、どんな迫害が來てもどんなに苦しい事があつても、そんなことに屈しないで、佛の正しい教を世の中に弘める爲に一身を犠牲にするといふ決心をしなければならぬ。斯ういふことでこの御書の全體が終つて居るのであります。

これは前にも申すやうに四條金吾の使者に持たせておやりになつた御書でありますので、鎌倉若くは房總地方の信者達の中に、あまり世の中の迫害が多いから、自分の法華經の信仰を變へようかなどといふやうな者もば

命を捨てなければならぬというても、ただ捨てても仕様がなない。戦に行つたらそれは鐵砲を射つて敵を打破り、いよいよいけなければ命を捨てても宜い。非常時だからと言つて無暗に鐵砲を射つて騒いだつて仕様がなない話である。皆それは時に依り場合に依るのだから、自分の現在の境遇、世の中の様子を能く見て、さうして自分一切の利害損得を超越して、本當に世の爲、人の爲に力になることをやりさへすれば宜いのであつて、人のやることを眞價ないでも宜い、周圍の境遇、周圍の事情が皆違ふ。斯ういふことを考へなければならぬ。それだから日蓮上人は、昔は臂を焼いて佛の恩に報いたといふこともあるけれども、なにもその眞似をするには及ばない。又昔は自分の身の肉を賣つて佛の教を弘めたといふことがあるけれども、その眞似をするにも及ばない。日蓮上人當時に於ては法華經といふものの價値が解らないのだから、その法華經の尊い事を世の中に弘め傳へる爲に命を惜しまないといふことが一番その時代に適つたやり方である。斯う思つて自分の一身の利害を離れて教を弘めて居るのだ。即ち「時に適ふのみ」いつでも佛教を弘めるといふ人はこの決心でなければならぬ。

さうして法華經を弘める爲に全力を注いで居れば、この功徳に依つて、自分は今凡夫であつても後の世に於てつぼつ見えて來た様子であります。そこでそれ等の人を勵まして、又四條金吾とか、富木常忍といふやうな、本當に終始一貫した信仰を有つて居る者には尙ほ一層その信心を勵むやうにといふお考から斯ういふ御書を書かれたものと思はれます。

この御書を前後通じて讀んで見ますと、法華經を弘める所謂法華經の行者の態度といふものを明かに説かれて居る。その點に於てこれは非常に尊い御書であります。幾度も申上げることありますが、宗教は實行が伴はなければ何にもならぬので、幾ら教理を研究しても、實際身に行ふことが出来なければただの物識りになつて終るのでありますから、それで日蓮上人はいつでも實行を主にして説かれる。ところが實行を人に勧めても自分がやらぬ事を人に勧めめるのだと人を本當に動かす譯には行かない。それで日蓮上人は自分の通つて來た所をいつても話される。斯ういふ場合に自分は一生懸命やつたからその困難な所を通れた。斯ういふ場合に迫害が來たけれども、その迫害に屈しなかつたから、自分の主張が貫かれたといふやうに、御自分の身に行うて來た所を擧げて大勢の弟子や檀那を勵まして居らつしやるのであります。これは非常に尊い所でありまして、吾々はどつちかと言へば理窟の方に執はれる方で、まあ現に私などもさう



でせう。本を読んで見て講義することならどうやら斯うやら人の前に立つてやるけれども、さあ自分でやつて見ますと、なかなか實行が難かしくていつでもこの事を恥かしく思つて居りますが、日蓮上人の御書を讀んで見ますと實にそこが有難い。自分で實際やつてから説かれるのだから間違ひはない。斯うやるつもりだといふのはいけない。日蓮上人の説かれる事にはつもりは一つもない、自分がこの通りやつたから斯ういふ結果になつた。この通りしつかりやつたから斯ういふ事が現れたといふやうに、皆實行した事を一々説かれるのでありますから、これはどしどしと皆の心に應へて行く譯であります。今後に於ても正しい信仰を貫いて行かうとすれば、幾多の困難のあることは覺悟しなければならぬ。今法華經を弘めて頭を斬られることもなければ鳥流しにされることもありはしませぬ。けれども今の時代でも正しい事を貫いて行くならば何等かの妨げを受け、何等かの迫害を受けるといふことは覺悟しなければならぬ。少くも損することとは覺悟しなければならぬ。儲けようと思へば正しい事は貫いて行かれない。殊に宗教などさうです。大勢の人に氣に入るやうに、自分の所が繁昌するやうにと思へば、皆の御機嫌を取つて嘘をついてやるより外ない。どうしても正しい事を貫いて行けば何等かの意味に於て迫害を

受け、何等かの意味に於て損するといふことだけは覺悟しなければならぬ。併し皆が得をしようといふ人ばかりでは本當に正しい教は弘まらぬ。損は覺悟で人が相手にしないならしないで宜い、自分の信する所を貫いて行くといふくらゐなしつかりした心持を有つて居る人があれば、それが世の中の頼りになる。又さういふ人が中心となつて弘まつた信仰が本當の信仰だと思ふ。兎角にどうも流行といふものを追うて居つたのでは本當の事は出來ないのでありますから、まあ皆様方の中には或は法華經の信仰でない他の信仰を有つたお方もお有りかも知れませぬが、信仰上の事は他所から強いる譯に行きませぬから、まあだんだんに考へて行かなければならませぬが、何れにしても縱ひ法華經を信じない人でも、日蓮上人の命を擲つて教を弘めたこの態度はこれを學んで宜いことでもあります。自分の一身の利害を捨てなければ本當の事は出來ない。併しながらそれを辛抱するつもりでやつて居つたら續かない、お灸をすえるやうなつもりで以て暫く齒を喰ひしばつて居れば熱い所を通り過ぎてしまふといふ譯には行かない。それで喜んでやらなければならぬ。そこが大事です。我慢するくらゐのことなら誰でも出来る。併し我慢する心持は永續きませぬ。一年や二年なら續くだらうけれども、永く續けば嫌やになつてしまふ。

ところがこれが喜びだ。斯ういふ苦しい思ひをして教を弘めることに依つて自分が前の世から作つたところの一切の罪が消えて、さうして自分の心の煩惱が除かれて、今は凡夫であるけれども、末には佛にも成れるのだ。この苦しいことが自分の將來の爲なんだから、喜んで満足してこの苦しい中を越えて行くべきだ。この決心があればどんな所でも越えられるのであります。そこがまあ非常に大事な事でありませぬ。辛抱しろといふ態度ではない。喜んで満足してやらなければいかぬ。他所から見ればああ辛からうと思ふが、當人は満足して居る。これらで一切の罪が消せるだらう。これで凡夫が佛の境界に近づいて行けるのだと斯う思へば、非常な喜びがある。日蓮上人の御一生といふものは、一方から言へば迫害に満ちた海にお氣の毒な御一生であるけれども、日蓮上人御自身はこれに満足して、日本國に於て自分ほど幸福な者はないといふ考で終始一貫して行かれたのであります。これは宗教のことばかりでなく、世の中のどんな事でも苦しい事を苦しいと思つて、我慢してやつたのでは苦しい事は越えられない。苦しい所を越えることが心の喜びであるといふ所まで行きますと、どんな事でもきつと越えられるに相違ない。この態度は有ゆる人の仰いで範とすべき事だらうと思はれます。

甚だ不十分な話でありまして、どうも斯ういふ尊い御書を私共のやうな者が一通り説明しましても、どれだけ本當の意味が發揮されたか、自分ながらも甚だ覺束ないことに思ひますが、お蔭様で障りもなくこの開目鈔全體のお話を終ることの出來たといふことは、私に取つて非常に有難いことに思ひます。(完)

### 新講座案内

日時 毎週土曜日午後二時—三時

講師 小林一郎先生

題目 法華經如來壽量品要解

主催 財團 法人 統一團



# 本佛實在の宗教哲學 (廿四)

河合 陟 明

## 十六、個佛の開覺における時間究盡の二面性(承前)

かくして時を不要とするや否や時を要し時を省なければならぬ。否、時を不要といふことは、それに先だつて既に時を要し、あらゆる意味に於て——即ち因果の實踐としての行為的にも統覺の認識としての教智的にも、乃至總てに亘つて——時を要し、かくてその無限の時を省み盡したときに、始めて時を不要となし得るのである、時を不要なりといひ得るのである。このとき始めて只未來の時を要するといふこととなるのである。しかし過去の時を要すると未來の時を要するとは、その意味が著しく異なる。しかし又全く離れたものでもない、共に佛格完成のために絶對的必要なのである。それは次第に語らねばならぬが、今たゞ *Promature* 豫料的に一言せば、一は絶對智完成のためであり、一は絶對的救済のためである。前者は他をしかも無限にして無始の先覺なるものを自らに求むるのであり、求めて自己を充實完成するのであり、後者は自らを他にしかも無限にして無終の後覺なるものに與ふるのであり、與へて他をして完成せしめるのである。こゝに過去完了と未來完了との時間性貿易すなはち實在性貿易といふ無限の旋回・無盡の交流が、個佛の始覺といふ有始の切點を通じて、窮みなく無始無終の佛界上すなはち本佛體内に行はれてゆくのである。

かくして時を盡すといふことは、時を消費し盡して、自己自身には時は無く、時を有たず、又時を要せず、しかも又他面顧つてその時を要し、時を有ち、その時の全經歷の上に眼を曝して、時の全内容を見盡す知り盡す、といふこととでなければならぬ。しかも前者の完成は後者の完成であり、*and the reverse the case* 逆も亦真なり、二者は畢竟一事の二面をなす。これを予が本有體系の原理論たる無作思想に於て明かにしたる如く、佛教史上、特に天台以後、就中日本佛教史上に於て、天台四教及び圓頓の妙觀いはゆる教觀二門における無作思想が、發展し變形し混亂し墮落して、正系傍系錯雜多面に亘つた、それを予が整理して組織體系化したる、予のいはゆる「性・修・證」無作三段、或は「法如々境・乘如實道・法如々智」なる境・乘・智三段の無作體系に於て、時を盡すといふことの意味を論ずるならば修と證すなはち行為と認識との二を全うすることによつて、一の性即ち法性真如の根本實在を全うするといふことである。これを純然たる本有體系に於ていふも全く同様である、即ち本有體系における原理的なる本行と本覺を、事的現實の有作と有始なる今有の實踐と始覺に於て完全に圓融することによつて、本有そのものを圓融するに至るのである。一大本有・即一大本法・即一大佛乘・即三軌の乘法としての、その三軌のノルム或はゾルレンなる軌範法則を以ていへば、資成軌の無限なる *offense System* 開展體系の極限に於て、觀照軌の自足的なる *Koschloskismus System* 完結體系に達し、それによつて眞性軌そのものをも亦 *mittheilend* 完結的たらしめ得るのである。菩薩の菩薩行としての、いはゆる働くものとしての時の消費完了は、佛果菩提の正遍知としての時の直觀完了・知見完了そのもの、所謂見るものの完全性・見ることの完壁度・即ち至き時の超越そのものと、表裏相即をなす。かく二面の作用を共に盡すことによつて、眞にその盡すといふ語の意味をも亦盡すことができるのである。而して佛果における時間規定に關してはなほ論ずべきことが多いのであるが、單に論理的形式的規定のみを以てしてはその實相を盡すことが難いのであるから、寧ろ今や具體的なる内容の規定に入つて、その上において更に時間的および超時間的考察、すなはち自覺の絶對位における永遠の問題を考へてみたいと思ふ。

## 十七、統覺における實相の多面性

顧つて根本の問題たる、佛智の統覺の *quid juris* 先驗的根據を求むる立場に還りきたるとき、先にまづ陰妄の一念に對する一心三觀を論じ、以て所與・反省・志向・直觀といふ實踐的ノエニスとしての認識作用となし、これを同時にノエマ的教理門と結合せしめて、もつていはゆる安體即眞として合して四教の體系を論じ、更に極果を加へて、もつて茲に佛性向覺の四段と果上における佛陀統覺との、自覺五段の發展體系を立し、この認識體系に對する實踐行



爲の天地に於て、今、涅槃の五行を展開した。この二面を合し、即ち知と行、智妙と行妙、或は聖行と梵行を合して、願信一體・智行一如の人格的淨化に徹したるとき、こゝに即ち天行の境界として、いはゆる境妙として、法性の實相・實在の幽微が、やうやく髣髴として、乃至はつひに歷々として、眼底に映じきたるのである。即ち眞如佛性の先驗的統覺力が、こゝに正にその睿智の權能を發揮しきたるを見るのである。云く、

大涅槃經云、一實諦者、則無有二故、名一實諦、又一實諦、名無二虛偽、無有三顛倒、非二魔所說、又一實諦、名常樂我淨、常樂我淨、無二空假中之異、唯有三實相因果、四諦、三寶、宛然具足、何以故、實相是法界海故、唯此三諦、即是眞實相也、一切諸法中、悉有安樂性、

夫法相眞正、誠如上說、行未會理、豈得名諦。若欲見諦、慚愧有羞、苦到懺悔、機感諸佛、禪慧開發、觀心明淨、信解虛融。若能安忍、法愛不生、無明窟破、如三明鏡不動、淨水無波、魚石色像、任運自明、清淨心常一、如是尊妙人、則能見般若、兩時見色、言有亦是、言無亦是、云何有是、目的之色、與眼相應、諸諦之理、與智相稱、名之爲有、云何爲無、無復堅冷軟動之相、名之爲無、論云、一切實、一切非實、亦實亦不實、非實非不實、如是皆名、諸法之實相、略而言之、隨智妙悟、得見三經體也。

こゝに於てか知る、凡て意識といひ知識といひ認識といひ、或は自覺と稱するところのものは、凡て統覺の原理によつて成立つてゐるのであつて、その統覺の *quid juris* は三諦法性の理に存し、またその統覺の *quid facti* は事の十界三千の實相に存するのである。而してこの理事二面を合せて眞の實相といひ、即ち諸法實相といひ、これを以て法華の實相・法華の經體、即ち宇宙法界における實在の全象とするのである。然しながらこの宇宙の實相・法界の實體いはゆる法華經の體玄義とはいかなるものであるか。「佛智に約して實相を説く」といふ、その佛智の認識の對象たり、佛陀の統覺の内容たる、眞の實在とはいかなるものであるか。いはゆる五眼具足の佛眼に映じ、一切種智の佛知見に現れたるところのものは、いかなるものであるか。今少しくこれを語らしめよ。

實相之體、祇是一法、佛設種種名、亦名(有門)妙有、眞善妙色、實際、(空門)畢竟空、如如、涅槃、(亦空亦有門)虛空佛性、如來藏、中實理心、(非有非空門)非有非無中道、第一義諦、微妙寂滅等、法華經云、無量義者、從二法生、其一法者、所謂實相、實相之相、無相不相、不二相無相、名爲實相、此從二

不可破壞、眞實得名、又此實相、諸佛得法、故稱妙有、妙有雖不可見、諸佛能見、故稱眞善妙色、實相非二邊之有、故名畢竟空、空理湛然、非一非異、故名如如、實相寂滅、故名涅槃、覺了不改、故名虛空佛性、多所含受、故名如來藏、寂照靈知、故名中實理心、不依於有、亦不附無、故名中道、最上無過、故名第一義諦。如是等種種異名、俱名實相、種々所以、俱是實相功能、其體既圓、名義無隔、蓋是經之正體也。

復次諸法、既是實相之異名、而實相當體、又實相亦是、諸法之異名、而諸法當體。大論云、若如法觀佛、般若與涅槃、是三則一相、其實無有異、若得此意、知種種名、皆名實相、亦名般若、亦名解脫、三法亦是諸法名、諸法亦是三法體也。

問、實相一法、何故名義紛然、答、隨彼根機、種々差別、赴欲、赴宜、赴治、赴悟、如來于時、以佛眼觀二、其信等諸根利鈍、以若干言辭、隨應方便、而爲說法、隨此四根、故四門異說、說異故名異、功別故義異、悟理不殊、體終是一、故四隨殊、唱、是一實之異名耳。(支義八下)

かくの如き實相の正體は、主として佛眼獨自の對象界として、佛界の事と法性の理との、事理の二面を一括して、一實諦の實在として説いたものであるが、更にこれに對して、九界迷妄の一切衆生界なる四眼の對象界をも加へ、以て十界全體の本體と現象といふ迷悟・權實及び理事の兩面を *ab uno mundo* 一舉に直觀するものが、即ち五眼具足の佛眼であり、三智圓融の一切種智なる佛知見であり、これを佛陀の十界統覺の認識と稱するのである。こゝに眞に多面にして微妙なる法界の實相が徹徹見せられるのである。

由來、眞有諸法、即ち十法界三千の現象は、その一元的根柢たる一大眞如法性に於てあるものであり、唯觀二法性、性淨若虛空、從つてまた本來、その點・空論・界、界無三界相、しかもまた十界無相、而具二十界相、ゆゑに即ち十界無相にして且つ十界有相なるものである。その十界三千萬假無量の陰入界の相、即ちその十法界の身土・色心・體用・性相、或はまた事理・因果・迷悟・依正といふ、多元的無限なる萬有諸法の實相を、佛陀の統覺とは、その無相而相、界有三界相、まゝの相、即ち假を假のまゝの相に於て、即ち一切の有を有として、その一々の存在的・性質的・作用的、因果報的あらゆる意味における限界性の相に於て、或は靜的の或は動的の或は事の(目的之色)或は理の(諸諦之理) *clear and distinct* なる、あらゆる限界定立あらゆる限界構成の相に於て見るものであり、且つしかも亦同時に、再



び、その界無三界相とこの無相の相・空の相いはゆる超限界性の相・限界融通の相、即ち本有一如の相に於て見るものである。かくしてこの假と空と、有と無との、この二面を同時にしかも汎宇宙的に認識するものであるのである。

元來、一空を萬假に限定すると、萬假を一空に包括するとの、二面一又は、即ち限界性と超限界性との二面の双非双照作用は、換言すれば、萬有が自己自身たることと共に、或は自己自身の存在と活動を肯定しつゝあるものであると共に、その内面的根柢に於て自己自身を否定し自己自身を超越し、即ち色は色たることを否定し、心は心たることを否定し、善は善たることを超越し、惡は惡たることを超越し、乃至、十界十如三世間・五蘊十二入十八界、十重無盡の緣起相・唯識無塵の十一識、皆悉くそのもの其自身たると共に、其自身を否定し超越してたゞ一空であり、一如であり、一普遍であり、一究竟等であり、一絶對の如たるものであること、唯だ一の場所たるものであること、即ち唯だ一大本の無作寂靜のものであることとの、この二面一及び性質、從つてその双非双照の妙觀は、(客觀即主觀・主觀即客觀、主客一如であり、萬有はその先驗的本來に於て主客統一の覺自體であるのである)凡て意識の内面的根本構造であつて、これを眞如の法性として三諦中道の先驗的統覺作用といふのであるが、吾々の經驗的自覺に於ては只儘かに質的にも量的にも、その部分的範圍における活動がなされるに過ぎない。實踐向上の道程即ち佛性向覺の過程にあつては、分々にこの認識を體驗することが出来る。六即位中における名字・觀行・相似・分證即等は即ちこれである。しかしこの中に於ても吾々はたゞ名字即の一分に過ぎないであらう。

南無妙法蓮華經 昭和十八年五月 恩師の圓寂に因むの日

## 大藏經要義續篇 (第廿九)

### 本多日生

#### 弟子品第三

爾の時に、長者維摩詰自ら念ふらく、疾に床に寝ぬ、世尊の大慈なんぞ愁みを垂れたまはさらんや。佛、其の意を知らしめして即ち舍利弗に告げたまはく、汝行きて維摩詰に詣り疾を問へ。舍利弗、佛に白して言さく、世尊、我れ彼に詣りて疾を問ふに堪任せず。所以は何ん、憶念するに、我れ昔、曾て林中に於て樹下に安坐せり、時に維摩詰來りて我に謂つて言く、唯舍利弗よ、必ずしも是れ坐するを安坐と爲さず、夫れ安坐とは、三界に於て身意を現ぜざる是を安坐と爲す。滅定より起すして諸の威儀を現する、是を安坐と爲す。道法を捨てずして凡夫の事を現する、是を安坐と爲す。心内に住ぜず、亦外に住せざる、是を安坐と爲す。諸見に於て動ぜずして三十七品を修行する、是を安坐と爲す。煩惱を斷ぜずして涅槃に入る、是を安坐と爲す。若し能く是の如く坐せば、佛の印可したまふ所なり。時に我れ世尊、是の語を説くを聞き默然として止み、報を加ふること能はざりき。故に我れ彼に詣りて疾を問ふに任へず。佛、大目犍連に告げたまはく、汝行きて維摩詰に詣りて疾を問へ。目連、佛に白して言さく、我れ昔し毗耶離大城に入り、里巷の中に於て諸の居士の爲に説法せり。時に維摩詰來つて我に謂つて言く、唯大目連よ、白衣居士の爲に法を説くこと仁者の所説の如くなるべからず、夫れ説法とは當に法の如く説くべし、法には衆生無し、衆生の垢を離れたるが故に。法には我有ること無し、我の垢を離れたるが故に。法には壽命無し、生死を離れたるが故に。法には人有ること無し、前後際斷ぜざるが故に。法は常に寂然たり、諸相を滅するが故に。法は相を離る、所緣無きが故に。法には名字無し、言語斷ぜざるが故に。法には説有ること無し、覺觀を離れたるが故に。唯大目連よ、法相是の如し、豈に説く可けんや。夫れ法を説く者には説も無く、示も無し。其の法を聽く者にも聞も無く得も無し。譬へば幻士の幻人の爲に法を説くが如し、當に是の意を建てて爲に説法すべし。當に衆生の根に利鈍有ることを了して善く知見に於て罣礙する所無く、大悲心を以て大乘を讚め、佛恩を報ぜんとな念じて三寶を斷ぜず、然して後に法を説くべし。維摩詰是の法を説ける時、八百の居士阿耨多羅三藐三菩提心を發しき。我れに此の辯無し、是の故に彼に詣り疾を問ふに任へず。



佛、大迦葉に告げたまはく、汝行きて維摩詰に詣りて疾を問へ。迦葉、佛に白して言さく、憶念するに我れ昔し食里に於て乞を行す。時に維摩詰來りて我に謂つて言く、唯大迦葉よ、慈悲心有つて而かも昔きこと能はず、豪富を捨て、貧に從つて乞ふ、迦葉よ、平等の法に住して應に次いで乞食を行すべし、不食の爲の故に應に乞食を行すべし。世間に住するに非らず、涅槃に住するに非らず、其の施有る者も大福無く、小福無く、益とも爲さず、損とも爲さず、是れを正に佛道に入りて聲聞に依らずと爲す。我れ是より來かた復た人に勸むるに聲聞、辟支佛行を以てせず。是の故に彼に詣りて疾を問ふに任へず。

佛、須菩提に告げたまはく、汝行きて維摩詰に詣りて疾を問へ。須菩提、佛に白して言さく、憶念するに我れ昔し其の舎に入りて從つて食を乞ふ。時に維摩詰我が鉢を取り飯を盛り滿して我に謂つて言く、唯須菩提よ、若し能く食に於て等しき者は諸法も亦等し、諸法等しき者は食に於ても亦等し。是の如く乞を行じて乃ち食を取る可し。若し須菩提よ、姪怒海を斷ぜず亦俱に與はず、身を壞せずして而も一相に隨ひ、痴愛を滅せずして明脱を起し、五逆相を以て而も解脫を得。其れ汝に施す者は福田と名けず、汝を供養する者は三惡道に墮せん、爲に衆魔と一手を共にして諸勞の侶と作り、汝と衆魔及び諸の摩勞と等しくして異なること無く、一切衆生に於て怨心有り、諸佛を謗じ法を毀りて衆數に入らず、終に滅度を得ず、汝若し是の如くならば乃ち食を取る可し。時に我れ世尊、此の語を聞き茫然として是れ何の言なるやを識らず、何を以て答へんかを知らず、便ち鉢を置きて其の舎を出でんと欲す。維摩詰言く、唯須菩提よ、鉢を取りて懼るゝこと勿れ、意に於て云何ん、如來所作の化人、若し是の事を以て詰らんに寧ろ懼るゝこと有りや、不や。我れ言く、不なり。維摩詰言く、一切の諸法は幻化の相の如し、汝今應に懼るゝ所有るべからざるなり。所以は何ん、一切の言説は是の相を離れず、智者に至りては文字に著せず、故に懼るゝ所無し、何を以ての故に、文字は性を離れて文字有ること無し、是れ則ち解脫なり、解脫の相とは則ち諸法なり。維摩詰はの法を説ける時、二百の天子法眼淨を得たり。故に我れ彼に詣りて疾を問ふに任へず。

### 記事

#### 本部 團報

大教團報 建長五年四月廿八日、日蓮聖人の大法門を師子吼されてから本年は第六百九十一年目である。世界各國の衆庶、その舉止に迷へるの時、救然として前途を照被せる獨り我國のみ、「日蓮一人この國に控うればこそ」とは豪語でも、妄想でもない、實に「生國の恩を報ぜんが爲め」であり「これほどの大志のものには前代にもなく、後代にもあるべし」とは覺えず「なんである。實に國家の興廢は國民精神に據るべきを深思する時、教化の重要性は、米粟以上に考慮されねばならぬ。身を養ふことを知つても、心を讀ふことに疎略であつては失敗である。「身の強き人も、心甲斐なければ多くの能は無用なり」といふことを忘れてはならぬ。日蓮宗の人々が、念佛に對抗してドンクツと唱題三昧に大層な信者と思ふは淺ましいことである。日蓮聖人の唱へらるる五字七字は、サウ上すべりの蛙の鳴き聲とは大違ひで、善量本佛の大慈大智大用萬感交々疎れる知法思國、信念意願の唱題たることを憶念すべきである。空題目であつては相濟まぬ。

本部に於て四月廿六日長朝の靈氣に浴し、日出時を期して莊嚴せる御寶前に、和實師、磯部氏及び四十餘名の若人等、法珠を捧げて大聖人の教恩に報ひ後、時節柄雨に適切な法話を聽聞し、入時前に散會して終日の健闘に資した。

大聖尊嚴日 毎月八日は一番電車で本部に清集、在職完遂と陣病疾諸苦の追福菩提、詔書奉讀等の式典を眞心から營み、終つ

て心の糧を滿樂し七時半頃閉會となる。

御難會 弘長の昔時を憶んで、日蓮聖人伊東の海中須岩上に、刻々迫る潮波の激流にも泰然自若として唱題されつあつた尊影は、此の狙はれた空壁下に如何に力強い事實を吾人に示現されたか、「一難來る毎に彌々悦を増すべし」の聖人の喜悅は何處から發するか、今の時、信不信を問はず靜かに擲へ、身に讀むべきであるまいか。

五月十日午前六時より於御寶前、第六百八十三年伊豆御難會を、大衆一結修行することを得て、報恩の萬分の一に擬せるを歡び、御遺教を頂戴して益々道念に鞭うち、七時四十分頃散會聖典講座 毎週土曜日午後二時より小林先生の講座は、最近法華經方便品の説明を五ヶ條に纏めてお話し下さつてゐる。次に善量品に移るでせうから、此の機會に一人でも誘合せて來聽さるべきである。その一念信解初隨喜の功德は分別功德品を往見されたい。

#### 福島 教信

町の會 四月廿八日、日蓮聖人御開宗の意義深い日、久々にて磯部先生の御出講が、大町の中村様方で夕景から營まれた。最近町會や常會などの集りが繁く、此の晩も夫等の爲に差支への方もあつたらしいが、一方高商の五味君等は寸暇を削りて臨席された。學年が短縮されたり、勤勞奉仕が激増したりして、學堂も極めて繁忙で殆んど一週七日に落付く日もあるか無し、併し猶ほ前線に立たず心靜かに勉強の出来ることは皇國なればこそ、全く有難い事と感懐興起せず居れない、全員擧つて止暇隙大に學業にいそむべきである。爰に正信の要諦は宥るのではなからうか、特に日蓮聖人の主義主張と、世界大戦は大關係あることを熟慮し、勇精を期すべく誓つて散會した。



閱費誌料維持費及寄附金領收 (自四月廿一日 至五月廿一日)

金貳圓貳拾錢也	東京	山岡吉三郎殿
金拾圓也	東京	大川正三郎殿
金貳圓五拾錢也	名古屋	石上長作殿
金貳圓貳拾錢也	東京	齊田貴司殿
金貳圓五拾錢也	東京	松田浩光殿
金貳圓五拾錢也	新潟縣	國吉眞文殿
金五圓也	北京	高橋大吉殿
金五圓也	福島縣	高橋傳殿
金壹圓貳拾錢也	福島縣	玉木万次郎殿
金貳圓貳拾錢也	東京	大久保久市殿
金貳圓貳拾錢也	東京	久保田英樹殿
金五圓也	東京	堀田辨戒殿
金參拾圓也	福島縣	中村美津殿
金拾圓也	長崎	二見儀六殿
金五圓也	東京	山田英二殿
金五圓也	東京	國吉眞文殿
金壹百圓也	大阪	友廣忠正殿
金五圓也	東京	金子光和殿
金五圓也	埼玉縣	石田勇三殿
金五圓也	東京	木村長生殿
金貳圓貳拾錢也	仙臺	三浦儀三郎殿

金壹圓貳拾錢也	東京	小林龜一郎殿
金參圓也	東京	小島經彦殿
金貳圓貳拾錢也	東京	石井仙太郎殿
金貳圓貳拾錢也	新潟縣	壘重能殿
金拾圓也	東京	大久保久市殿
金拾圓也	東京	長谷川義一殿
金貳圓貳拾錢也	東京	藤井康人殿
金五圓也	同	法道院殿
金貳圓貳拾錢也	岩手縣	依田才丞殿
金五圓也	富山	開田太郎殿
金貳圓貳拾錢也	秋	増野純亮殿
金五圓也	岐阜縣	佐藤良淳殿
金貳圓五拾錢也	三重縣	古市二郎殿
金五圓也	横濱	日山與三郎殿
金八圓八拾錢也	青島	竹原寶瑞殿
金貳圓貳拾錢也	熊本	平岡龜雄殿

右種有入帳仕候也 (以是領收證代用)  
財團法人統一團會計

本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改版特價	金壹圓九拾錢
法華經要義	編天覽	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓	同	金壹圓五拾錢
日蓮主義精要	同	金貳圓九拾錢
法華經要品	同	金五拾錢
本尊意識に就て	同	金貳拾錢
法華經の心髓	同	金壹圓五拾錢
黎明の原理	同	金五圓

佛敎の心髓	同	金壹圓
動行作法	同	金拾錢
本多日生上人	同	金壹圓七拾錢

皇道と日蓮主義	同	金壹圓
---------	---	-----

東京市小石川區普羽町六ノ十七  
財團法人 統一出版部  
番〇二四九東京替振

一册	金貳拾錢	送料壹錢
半ヶ年	金壹圓貳拾錢	送料共
一ヶ年	金貳圓貳拾錢	送料共

昭和十八年五月二十七日印刷納本  
昭和十八年六月一日發行  
(第五百七十九號)  
東京市小石川區普羽町六ノ十七  
編輯部 滿事  
發行部 磯部 英二  
印刷部 野島好文堂印刷所  
東京二〇五二

發行所 財團法人 統一團  
東京市小石川區普羽町六ノ十七  
電話 午五三三六番  
夜九四二〇番  
配給元 日本出版配給株式會社  
東京市神田區淡路町二丁目九番地



# 統

法財人團

統一團發行

## 次 目

法 悅 と 願 行 (完結).....	本 多 日 生
立正安國論講話(第一講).....	小 林 一 郎
本佛實在の宗教哲學(二十五).....	河 合 陟 明
優婆塞戒經要解(其十).....	本 多 日 生
記 事	
○本部團報	
○福島教信	
○入帳報告	

號 月 七 年 八 十 四 第

統

一

昭和三十年十二月二十四日 第三編 郵便物認可  
昭和十八年五月二十七日 印刷  
昭和十八年六月一日發行 紙一冊 一冊(一日發行)

第五百七十九號

第四十八年 六月號

昭和三十年十二月二十四日 第三編 郵便物認可  
昭和十八年五月二十七日 印刷  
昭和十八年六月一日發行 紙一冊 一冊(一日發行)

第五百八十號

第四十八年

第七六號